

「モジホコリの実験 (11)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

モジホコリの変形体は、周囲の環境が悪化すると、変形体同士が一カ所に凝集・乾燥して、休眠体である「菌核」を形成する。しかし、10回に1回ぐらいの頻度で、休眠体を形成せずに「子実体化」する場合もある。子実体とは、菌類でいう「キノコ」と同じで、胞子を形成して飛散させる器官である。

変形菌の魅力は、実はこの「子実体」にあり、その形状や色彩から「ウリホコリ」「ムラサキホコリ」「ススホコリ」「タマホコリ」などの名称がついている。



モジホコリの場合、菌核化する場合は変形体が一カ所に集合するが、写真のように等間隔に黄色い小塊を造り出したら、子実体形成に入った証である。



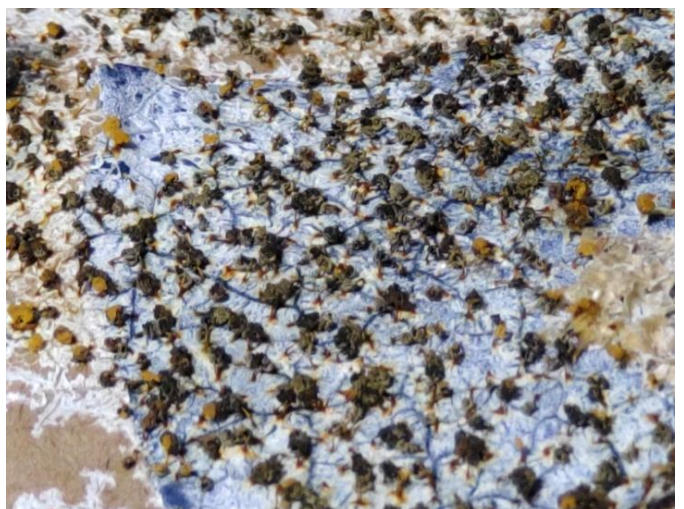
これは「タマホコリ」の一種の子実体である。若い子実体は橙色だが、成熟すると紫褐色に変化する。



拡大してみると、短い「柄」の上部に、いくつもの黄色い小塊がついているのがわかる。これがモジホコリの「若い子実体」(成長過程の子実体)である。



これはムラサキホコリの子実体をつぶしたところだ。この子実体はやや未成熟で、中にはペースト状の胞子があった。完全に成熟すると外皮が破れて、風によって自然に胞子が飛散する。



わずか数時間後には、子実体は一気に成熟し、真っ黒な小塊に変化する。お世辞にも「美しい子実体」とは言えず、あまり魅力を感じない姿だと思った。